

[研究ノート]

富岡鉄斎「松花堂幽居図」(清荒神清澄寺鉄斎美術館蔵)

—「松花堂所用牧谿墨」との関わりから—

日本近代を代表する文人画家・富岡鉄斎(1836~1924)は、日中の膨大な古典籍を説破、古書画文物等を週眼する中で、日中の歴史人物への顕彰意識のもと、その故事にまつわる作品を数多く生み出しました。本稿では「松花堂幽居図」(図1)。統本淡彩、清荒神清澄寺鉄斎美術館蔵)をめくり、鉄斎が日中の歴史人物を尊ぶ想いをどう表したかを見ていきます。

「松花堂幽居図」は、画中の使用印と書体から、鉄斎60代頃の作とみられ、江戸の能書家・画僧として知られる松

花堂昭乗(1582~1639)が、石清水八幡宮を擁する男山(今の京都府八幡市)の泉坊に、方丈「松花堂」を建てて隠棲した逸話を、山水画風に描きます。後方に聳えるなだらかな山容や、山肌、石畳、石灯籠等に施された鮮やかな緑色系顔料と代赭が、やまと絵の趣を想起させますが、それと共に山肌や樹木、家屋などにみられる、墨の濃淡や乾潤の変化を最大限に活かした表現が印象深い作品です。画面右下の款記で鉄斎は、本図を松花堂が用いた墨で描いたと述べており(「用松花堂所用墨写此。鉄斎外史」)、何よりこの墨の効果を示すべく、本図を制作したことが窺えます。

本図上部の鉄斎自題の末尾には、その墨の拓本「牧溪墨」(図2)が捺されています。これは実際には、松花堂旧蔵と伝わる宋末元初の画僧・牧谿(13世紀活躍)所用の中国墨を、奈良の製墨の老舗である古梅園が、江戸の天明年間(1781~89)に模造した墨です。オリジナルの牧谿墨は、松花堂以前には禅僧の沢庵宗彭や茶人の武

野紹鷗といった、名だたる文化人達の手を渡っており、本図上部に鉄斎は、沢庵が松花堂に牧谿墨を贈った際に詠んだ和歌(「真跡沢庵和尚消息」「古画備考」十下「松花堂流」所収)を書いています。なおそのオリジナルらしき墨は、古梅園第6代当主・松井元泰(1689~1743)撰「古梅園墨譜」に「松花堂画用の墨方 牧溪墨」として録され、元泰「玄々斎隨筆」にもこの牧谿墨の言及があり、名墨として珍重されてきたことが窺えます。

鉄斎はこの模造墨を、かつて奈良に遊んだ際、古梅園第11代当主・松井元淳より得たと、「宋牧谿揮毫図」(「墨癖余筆帖」より。大正6年[1917]、辰馬考古資料館蔵)の中で回想しています。模造墨とはいえ、墨の蒐集に熱心だった鉄斎にとっては、オリジナルを得たに等しい意義と喜びがあったのでしょう。それは「松花堂幽居図」の自題にオリジナルの伝来を引用していること、款記であえて模造墨といわずに「松花堂所用の墨を使った」と述べていること等からわかります。更に鉄斎は、この模造墨を伝牧谿「五祖荷鋤図」(所在不明)の模本(50代頃。清荒神清澄寺鉄斎美術館蔵)を制作する際にも用いるなど、尊崇する牧谿を偲ぶ縁としても珍重していたことが窺えます。

「松花堂所用牧谿墨」をめぐる日中の歴史人物への想いは、本図の絵画表現においてどのように表れているのでしょうか。鉄斎は、主題が日本か中国かによって、画風や書体を適宜使い分けていました。例えば、室町の歌人・肖柏が草庵で憩う「隠士牡丹花肖柏図」(図3。明治38年[1905]、清荒神清澄寺鉄斎美術館蔵)は、日本のやまと絵風の線描や鮮やかな色彩表現で全体をまとめています。一方、「松花堂幽居図」は、一部の色彩と山容表現等はやまと絵に添いつつも、それ以上に、水墨の効果へと意識を向けています。これ

は本図に使用した墨の効果を最大限に活かすためだけでなく、墨の由緒として松花堂と同等に重要であり、「観音猿鶴図」(国宝。大徳寺蔵)などの名画で知られ、鉄斎自身も私淑した水墨画家であった牧谿を意識したものとみるべきでしょう。

更に画面構成に着目するならば、本図は、中国の明時代(16世紀)以降、蘇州文人の間で流行した、自身あるいは知人の隠棲する場所を理想化して表す「隠居山水図」の一定型に近似します。それは縦長のフォーマットに、前中景には数本の樹木に囲まれた小さな家屋と庭と、その中で安らぐ文人の姿を、後景には数塊の山を表し、画面上部には画の内容にまつわる賛を付すというシンプルな構成です(図4)。沈周「夜坐図」明・弘治5年[1492]、台北國立故宮博物院蔵)。中国の古画や漢籍を熱心に学んでいた鉄斎が、そうした中国の隠居山水図の伝統を知っていた可能性は高いといえます。

以上のことから、本図はやまと絵と水墨画の技法を折衷するだけでなく、松花堂の幽居する様を中国の隠居山水図風に描くことで、本図の成立において重要な「松花堂所用牧谿墨」の由緒を象徴し、日中の歴史人物(松花堂昭乗たちと牧谿)を顕彰するものととらえられます。両国の歴史文化について深い知識と理解をもち、あらゆる事物にまつわる由緒を大切に鉄斎の想いが顕著に表れた作品として、本図を位置付けることができるでしょう。

(都甲さやか)

※図3は「生誕150周年記念 富岡鉄斎」展図録、京都市美術館、1985年。図4は「明四大家特展 沈周」展図録、台北國立故宮博物院、2014年から転載しました。



図1



図2



図3



図4